

第13回

トランスジェンダーの あみちゃんとお母さん

LGBTユースの居場所にじーず代表

遠藤 まめた

えんどう まめた 1987年埼玉県生まれ。トランスジェンダー当事者としての自らの体験をきっかけに、LGBTQの子ども・若者支援にかかわる。著書に『先生と親のためのLGBTガイドーもしあなたがカミングアウトされたなら』（合同出版）ほか。



この連載では昨年度は一年間にわたり、学校でどのように多様な性を尊重できるのか、その概論を紹介してきました。今年度は、実際に各現場でどのような取り組みや葛藤があるのかをインタビューし、紹介していきます。

インタビューの第一弾は、小学生のあみちゃん（仮名）のお母さんに話を聞いてみます。あみちゃんは男の子の身体で生まれ、今では元気いっぱい女の子と

して日々を過ごしているトランスジェンダーですが、学校の中で苦勞する場面もたくさんあったようです。

「選ばせてください」

物心ついた頃から、大好きなのは「プリキュア」「いちご」「ピンク」だったあみちゃん。二歳のとき、お風呂に入っていると「これいらぬ」と、おまたを指差して言いました。男児用の黒いジャージを着せられた自分の写真を見つげると、かわいくないからとクシヤクシヤにしてしまうこともありました。お兄ちゃんがいましたが、お兄ちゃんのお下がりではなく、近所の女の子からもらった自転車喜んでこいでいました。「おまえって妹と弟の二人いるんだっけ？」

本当は二人きょうだいなのに、お兄ちゃんをよく間違えられていたようです。

バスオトルをスカートのように腰に巻いて遊ぶあみちゃんを見て、知り合いがふりふりのスカートをくれました。ドレスのお下がりももらいました。まわりから「男の子なんだから」と押し付けられることもなく、あみちゃんは家族の理解にも恵まれて、のびのびと育っていました。

幼稚園に入るときには、「ピンクやかわいいものが好

きだから選ばせてください」とお母さんは入園児の書類に書き、先生もそれを尊重してくれました。入園してしばらくたった頃、幼稚園のバスから、あみちゃんはピンクの鯉のぼりを持ってうれしそうに降りてきました。男の子は青、女の子はピンクの鯉のぼりでしたが、あみちゃんは自分の好きな色を選べたようです。

お兄ちゃんのお下がりのズボン制服を着ながら、女の子たちとプリキュアごっこをして遊び、プリンセスの絵を描いていたあみちゃんを見て、「ラッキーだね」と声をかけてくれる他の保護者もいました。

「こういう子は絵が上手だとか、何かが得意だとか、才能があるんだよ」

それでも、年上の子からは「男なの？ 女なの？」と聞かれることがあって、あみちゃんはそれを嫌がっていました。運動教室では男女で分かれて座るよう指示が出され、あみちゃんは女の子の列に並んでは、何度も戻されていました。

小学校入学の際に困ったこと

小学校の就学時検診では、困ったことが起きました。あみちゃんの通う予定の小学校では、就学時検診のときに五年生が、入学予定の子どもとペアになって検診を回りますが、男の子には男の子、女の子には女の子がペアになるルールで、あみちゃんに付き添うこと

になったのは男の子だったのです。

いつもの格好で行き、男の子の名簿に名前があったので、男の子の列に並びました。男の子の列に一人だけ外見が女の子のあみちゃんが並ぶので、まわりからは不思議な目で見られます。列を変えられそうになり、名簿上この列であることをお母さんが話すと、先生は明らかにひるんだ様子で「後ろから見ただけ、ごめんなさいね」と口走ります（前から見たのですが、あみちゃんは女の子にしか見えなかったのですが）。

そして、あみちゃんのペアだけが「男の子が女の子をつれている」状態で検診を回らなくてはなりませんでした。

その後、校長先生との面談があり、お母さんは書いたメモを手にもみました。

まず「くん・さん」で呼び分けないでほしいと伝えましたが、校長先生の反応はにぶいものでした。

トイレについても答えが出ませんでした。学校のトイレは男子トイレと女子トイレの二種類だけで、性別を問わずに使える「だれでもトイレ」は設置されていませんでした。

あみちゃんのお父さんは、真面目な顔で、「トイレに行きたくなったら、学校の隣のセブンイレブンに行くんだぞ」とあみちゃんに言いましたが、小学生が休み時間のたびにコンビニに行くなんて現実的ではありません。

面談のとき、女子トイレを使っているかと尋ねても、校長先生はウンとは言ってくれませんでした。しかし、男子トイレを使ったら使ったで、あみちゃんの外見は女の子なので混乱が生じます。校長先生は、男子トイレを使いなさいとも言えません。

結局トイレ問題は解消しないまま、学校での新生活が始まりました。あみちゃんは、許可のないまま女子トイレを使いはじめました。廊下で出会った先生が「あー」という顔をして、それでも特に子どもたちの間で問題が起きていないことがわかると、やがて「あみちゃんが女子トイレを使うことは特に問題ではない」と先生たちは認識しはじめました。

「くん・さん」の呼び分けについても、校長先生の認識が深まるにつれ、「さんに統一した呼び方によろ」となり、全校集会でその旨の呼びかけが行われました。ただ、先生によつては、どうしても性別による呼び分けにこだわる人もいて、そのような先生は「くん・さん」をずっと使い続けました。

一年生の途中で、あみちゃんはテストの名前を書かなくなりました。男っぽい戸籍上の名前がいやなのだとわかり、担任の先生は「本人がよければ、明日から変えますか」と提案してくれました。以前にも帰化した子どもが通称名を使った例があったとのことで、これはスムーズにできました。

これから小学校に入学するタイミングで、学校の雰

囲気が親子ともによくわからない中で、さらに教員が性の多様性について無知であるとなると、学校に出席して子どものことを交渉することは保護者にとっては大変な負担だとお母さんは語りました。

「何言ってるのこの人って思われなにか、とてもドキドキしながら交渉した」

話をうかがっていると、あらかじめ教員に知識があるのとないのでは、大変さがまったく違うように感じました。

先生の言動が持つ重み

私は、都内で開催している「にじっこ」という、一五歳以下のLGBT（や、そうかもしれない）の子どもと家族のグループの運営にかかわっています。ここでは、あみちゃんと同じような未就学児や小・中学生の子どもたちや家族と出会います。

このグループに低年齢でつながる子どもたちは、家族の理解に比較的恵まれています。家族が「子どもに性別違和があるなんて、何があっても絶対に認めたくない」という場合には、こうしたグループにつながることはないからです。

日本で初めて小学校でトランスジェンダーの子どもに学校として対応した事例として広く知られているのは、二〇〇六年の神戸市のケースです。それ以降、数

として多くはないけれど、各地でちらほらと小学校で個別対応がなされる事例は出てきました。

この文章を書いている私を含めた多くのトランスジェンダーの大人にとっては、これは夢のような話です。私は小学生の頃、スカートがいやで、ランドセルにぐしゃぐしゃにスカートを詰めてズボンで登校し、それを母親に見つかってひどく叱られていました。年に数回くらいはスカートを履いてほしいと懇願され、玄関を出たところでスカートの上からズボンを履いて登校したこともありました。テストに名前を書かないことを「性別違和によるものだ」と見抜く人はいませんでした。それを思えば、幼い頃から家族や先生が味方になってくれる子どもたちは恵まれていようにも感じるのですが、残念ながら当人たちは現在でも日々傷つき、闘っています。

あみちゃんは、小学校に入学してから「おかま」「本当は男の子なんでしょ」と意地悪をされるようになりました。

三年生のバレンタインデー、みんなが公園でチョコレートを交換している日にも、あみちゃんは傷つくことを言われました。いじめられていることをお母さんが先生に相談すると、「身体が男の子で心が女の子なんです、子どもには理解できないんですよ」と先生は言いました。このことを知ったあみちゃんはとてもしョックを受けて、「私が死んじゃったら、お母さんも死ぬ?」

「私はピンクが好きだから、私が死んだらピンクのお花をあげてほしい」と口にするようになりました。

お母さんが再び相談すると、先生は終業式の日、あみちゃんに「この学校の先生はみんな味方だからね」と話してくれました。この話をお母さんに報告したときのあみちゃんは、うれしそうでした。

四年生の二次性徴に関する授業では、例年は女子だけに生理用品の試供品を渡していたのを改め、男女混合で月経についての話をして、男子も生理用品に触われるようにしました。あみちゃんがいることに加えて「男の子も月経について学んだほうがいい」との考えから、担任の先生が前向きに対応してくれました。

大人の言葉や態度が、子どもを絶望させることもあれば、希望になることもあります。

今回ご紹介したあみちゃんの話は「大人から見えている子」でしたが、大人の知らないところで性の違和感を抱えている子は全国にたくさんいます。

学校のさまざまなルールは、トランスジェンダーの子がいることを前提にしたものになっていきますか？それとも、不必要な場面でも性別で分けて、そこで困る子のは想定していないつくりになっていきますか？子どもや保護者のカミングアウトを待たずとも、改善や工夫ができることがあれば、ぜひ取り組んでほしいところです。